

ライラさんは将棋アイドルになります 9

「ではいよいよ、アイドル対抗将棋団体戦の時間です！」

ステージ上には、対局用のセットが組まれていた。右側には大盤があり、辻村と三東が立っていた。

「いよいよですね、三東先生！」

「そ、そうね」

元気いっぱいの辻村に比べて、三東はがちがちだった。教え子たちのことが心配なのもあったが、観客の多さにビビっていたのである。

「出場順はまだ公開されていないんですけど、作戦は練ったんですか？」

「いやあ、それほどは」

「出たところ勝負な感じで？」

「まあ、頑張ってきたものを出すだけなので」

「なるほど」

会場が暗転する。

「では、いよいよ第一局の開始です！」

大きなファンファーレがファンファンと鳴り響い

た。

そして、再びステージが明るくなり……そこには恵磨がいた。

「あれ？ リハと違う」

目の前に誰もおらず、恵磨はきょろきょろとあたりを見回す。司会も解説者も、あたりを見回す。ただひとり、記録係だけが申し訳なさそうに手を挙げていた。

「あの……ここにいます」

指さす先は、記録用の机だった。

「やっぱり将棋は……むーりいー……」

か細い声が聞こえる。

「あの、辻村君。そちらのチームの先鋒は……」

「森久保乃々さん、あんなところに隠れているんですね。さすがアンダーザデスクの一員」

「いやでもあそこじゃ指せないよね？」

三東が戸惑っているところへ、ガラガラと音を立てて台車が運ばれてきた。

「間に合ったようだな！」

「あ、池袋さん」

辻村が白衣を着たツインテールに眼鏡の少女に手を振る。

「え？ え？ 今度は何？ あのピンクのアームは

……」

「思念だけで遠隔操作できる将棋ロボット、『王手くんロボ』だ！　これで机の下にしながら将棋が指せるぞ」

「すみません池袋さん、急に無理を言って」

「ちょうどロボットアームの開発をしていたところだったんだ。よし、セッティングできたぞ」

「ありがとうございます」

恵磨の向かい側に、大きなロボットアームが設置された。

「辻村君、あの子はどこかの開発者なの？」

「いえ、アイドルですよ」

困惑する三東を置いて、対局は開始されようとしていた。

「見てください、王手くんロボが振り駒してますよ」

「滑らかな動きだなあ」

「と金が四枚。仙崎さんの先手ですね」

「よっしゃ！」

「……うう……後手番はふーりいー……」

片方のアイドルは姿を見せないまま、ついに対局は始まったのであった。

「不思議な形になったね」

大盤には、恵磨と乃々が対局している盤面が再現されている。恵磨は左側に美濃に囲っていた。

「森久保さんの得意な形なんです。通称『むりむり矢倉』」

「固いのかなあ」

後手玉は居玉のままだったが、その周りに矢倉城ができていた。他の駒も自陣近くに全部残っていた。

「このまま動きたくないです……」

机の下から震える声。

「いや、なんかおもしろいね！ アタシが攻めるの待ってるのかな？」

「攻めないでほしいんですけど……」

恵磨も駒を慎重に配置して、また仕掛けずにいた。

「そういえば僕、道場で見たことがある気がするんですよね」

「たしかに道場で指してたんだよ。彼女はアイドルになる前から将棋好きだったんだ」

「スカウトの決め手とかあったんですか？」

「元気でかっこいい……のものもあるけど、何より名前だね」

「名前」

「『せんざき』だよ。絶対天才だ」

「確かに」

盤面が膠着状態なので、雑談が多くなる。そして、再び記録係が手を挙げた。

「えっと……千日手です」

辻村と三東は口をぽかんと開けていた。同一局面が四回になったことに気が付かなかったのだ。

「珍しいですよ。かなり迂回を経ての千日手ですね」

「仙崎さんがこんなに攻めないのも珍しい」

「先後を入れ替えてですね……あれ」

盤の前から、恵磨も姿を消していた。記録係の横から、机の下を覗き込んでいた。

「やっぱり相手の顔が見えないとテンション上がりきらないね！ アタシもここで指そうかな」

「あええ…困るんですけど……」

「じゃあさ、出てきなよ。アタシと将棋を楽しもう！ 今日のために練習もしてきたんだろ？」

「ううう……わかりました……」

机の下から、ゆっくりと少女が這い出てきた。盤の前まで来て、王手くんロボの後ろに座った。

「もりくぼ、やっぱりまだ恥ずかしいので……指すの

はロボットに任せていいですか？」

「わかった！　じゃあ、今度はそっちが先手。始めようか！」